

獣害対策への取り組み

獣害対策について、本間喜治さん(花栗と、赤名の公民館主事)をしている加藤郁海さん(塩谷)に聞きました。

獣害対策には後継者が必要だ、このためには行政がしっかりとサポートしていかなくてはならない。

「銃には抵抗感があるが、この町には必要不可欠。」と熱く語られました。

獣害対策の現状はどうか

〈本間〉頼原も猟師の人数が減ったな。

今は、寺沢、敷波に1人づつ、花栗に3人だが、猪が出ると、奥畑や佐見の方まで行かなくてはならないので大変だ。猪が「おり」に掛かると、留めをするが、鉄砲がなくてはならない。「はこわな」の免許を取った人もいるが、税金ばかり払って猪が取れないので、やめる人もいる。

「くくりわな」はベテランばかりで、技術や経験が必要だ。後継者を育てなければ先では大変なことになる。

政府は20億円掛けて猪と鹿の数を半分程度に調整するとしているが

〈本間〉半減させるのは無理で、2〜3割できればいい。猪は一度に5頭くらい産み、春と秋に

産めばすぐに増えてしまう。今の猟師たちが元気なうちに後継者を養成せんといいかん。ベテランについて歩き、撃ち方、猪の居場所の探し方とか、今のうちに習つとかないと、猟師がいなくなつたから誰かが直ぐにやることは無理だ。



左から本間さんと加藤さん

ただ、鉄砲への抵抗感があるから誰でもいいと言つて訳ではないと思う。猪の被害対策はもう個人でできるレベルじゃない。行政が関わらなければ無利だ。

今までの話を聞いてどう思う

〈加藤〉狩猟については興味があるが、行政の力で後継者を育成するべきだと思つた。

〈本間〉猟師の鉄砲所持には大きなハードルがある。これがひとつ問題だ。

警察は銃の規制に厳しいが、獣害は深刻さを増すばかりだ。銃所持は管理や規制に縛られている。また、補助はあるが高額な狩猟免許税が毎年掛かってくる。趣味や儲けのために狩猟をやっている訳ではないのに課税されるのは問題だ。

さらに、銃許可の更新時や弾丸購入まで、県証紙税が必要で、重い負担を強いられている。障害はあるが獣害被害を防ぐ猟師さんが居るから、私たちは頼りにしている

〈加藤〉「問題だ」といつているだけでは何も解決にならない。すでに取組んでいる町もある。追いついていく努力が必要だ、手遅れになると猪が人口よりも多くなつてしまうのではないかと心配になる。

この9月議会では「大しめなわ創作館の設置・管理条例」「指定管理者の指定」に質疑が集中しました。詳しくは9ページの「議会は見ている」をご覧ください。

編集後記

さて、今回、「有害鳥獣対策」について一般質問をしました。町内各地からイノシシ被害の報告があり、小規模な米作農家では「金網柵・電牧等の設置費用が米価では賄えません。天候も悪く、水田管理の全てを営農組合へ任せたい」との声もあります。イノシシ・熊・鹿・タヌキ、この上、猿でも現れたら、担い手どころか農業をする人がいなくなります。

そのような事態にならないよう、行政は勿論、みんなで対策を考えていきたいものです。良い知恵がありましたら何なりと教えてください。

議会広報編集委員会 内藤 真一

今月の表紙写真



町内にある島根県中山間地域研究センターには、生態調査のために飼育されている猪や鹿などがいることをご存知でしたか。このところ各地で猪や鹿などによる獣害被害が増大し、農家は深刻な状況に置かれています。この日も県の鳥獣対策課職員と町の対策担当職員が今後の猪対策を協議中。猪がこっそり聞き耳をたてて「これは大変だ。みんなに知らせなくちゃ!!」。これが猪被害が減らない原因の一つでないことを願います。